菟原処女伝説の伝承
――塚をめぐって――

神野富一

一

一人の処女を複数の男が争い、それを悲嘆して処女はついに死を選ぶという妻争いの話が、万葉集にはいくつか歌われている。中でも菟原処女伝説は、高橋虫麻呂・田辺福麻呂・大伴家持といういずれも著名な万葉歌人たちの詠歌の対象となり、奈良朝当時にあってすこぶる貴族官人たちの興味をそそる話柄であったらしい。奈良時代より後も、この話は大和物語の生田川伝説へと展開し、また中世、謡曲求塚の素材ともなるなど、長い享受史をもつ。

伝説は、「古」の摂津国菟原地方（現在の芦屋市から神戸市東部にかけての一帯）を舞台とする。そこに美しく生い育った菟原処女を、隣国和泉の血沼壮士と地元の菟原壮士とが激しく争うが、処女はそれを苦にしてついに自殺を遂げ、男たちもすぐさま後を追う。残った身内の者たちが、その悲惨なできごとを将来かけて伝えようと、三人の墓を造った――このようなストーリーを、特に高橋虫麻呂は劇的に歌いあげ、自らも涙している。

そうして、その虫麻呂の歌（巻九、一八〇九）の末尾近く、

処女墓　中に造り置き　壮士墓　こなたかなたに　造り置ける

とあるように、八世紀当時には、二つの壮士墓が処女墓をはさむかたちで、三人のものと伝えられる墓が現実に存在したらし

い。処女墓は「奥つき」とも表現されているが（巻九、一八〇一・一八〇二・一八一〇・巻十九、四二一一）、「奥つき」は「奥槨」の表記例（巻三、四三一・四七四・巻九、一八一〇）があり、「槨」を和名抄に原本系玉篇を引いて「槨　周ゝ棺者也」とするから、もともと奥まった埋葬のための施設を意味する。それが、村田正博氏の説くように、意味が広がって墓全体をさすようになり、しかもその墓とは古墳墓であると考えられる。(注1) 万葉集には、「奥城」（巻九、一八〇一・一八〇二）、「奥津城」（巻三、四三二・巻九、一八〇七）の表記例もあるが、これについては、沖縄や奄美の城（グスク）がもと人骨収納所であったという指摘(注2)を考え合せてもよいだろう。また播磨国風土記の、集積した梗（ぬか）で成ったという丘を、「墓（つか）」ともいい、また「城牟礼（ぐすくむれ）山」（ムレは朝鮮語で山の意）ともいったという記事（神前郡梗岡の条）も、墓と城とのある時期における相同性を暗示する。

さて、そのように八世紀当時において、菟原地方に処女墓・壮士墓と呼ばれる三基の古墳墓が存在したのだが、現在も神戸市の旧菟原（うばら）郡内に、伝説の主人公たちの墓として「処女（おとめ）塚」「求女（もとめ）塚」と呼ばれて伝えられている三基の古墳墓が存在する。(注3) それも、虫麻呂が歌ったように、処女塚を中にして東西の求女塚がそれをはさむ位置関係をまもっている（略図参照）。それぞれの古墳の墳形・規模・推定築造時期および所在地は、次の通りである。(注4)

名称	墳形	規模（全長）	築造時期（推定）
東求女塚	前方後円	約八〇m	五世紀前後
処女塚	前方後方	約六九m	四世紀後半
西求女塚	前方後円	約九〇m	五世紀前半

（所在地）

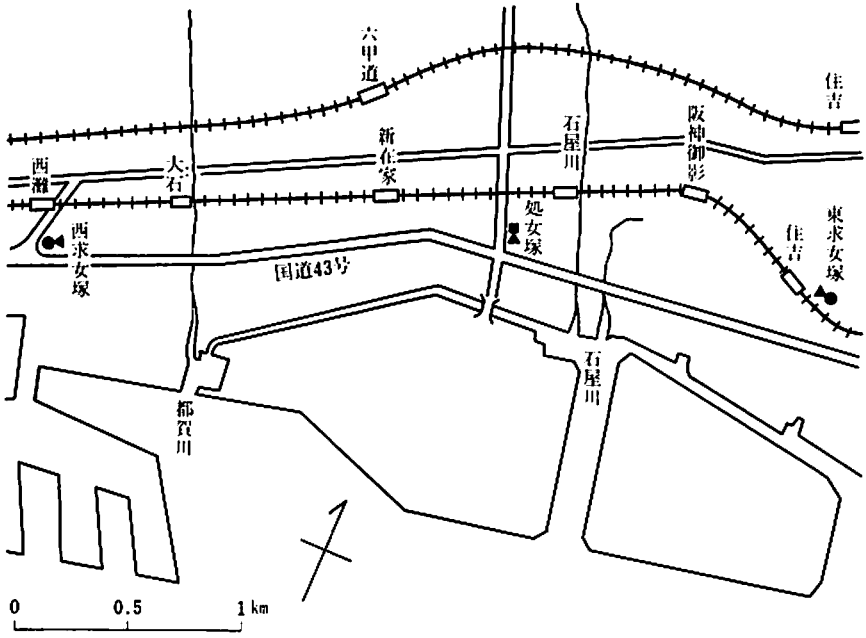
東求女塚　神戸市東灘区住吉宮町一丁目

処女塚　同市同区御影塚町二丁目

西求女塚　同市灘区都通三丁目

ちなみに、東求女塚は血沼壮士の、西求女塚は菟原壮士の墓と、それぞれ伝承されている。

さてここにおいて、菟原処女伝説の伝承に関する重要な問題の一つとして、これら現在にまでそれと伝承されてきた三古墳が、八世紀に虫麻呂らが見聞した古墳墓と同一のものであるか否かという問題が提起される。いま、伝承に関する問題といったが、しかもこの問題は、伝説が現実の墓の存在を重要な構成要件としているために、伝説形成の問題にも深く関与している



と思われる。そこで、本稿の目的を、伝説形成の問題にふみこむ前提として、まず墓の伝承の真偽如何という、文学論以前の問題を解くことに定めておきたい。

二

従来、この現在の処女塚・求女塚が古えのそれであるかどうかという問題について、判断留保の立場を別にすれば、対立する二つの見解が存在する。すなわち、一方は現在まで伝承されている三古墳を八世紀のそれと同一のものと見るものであり、他方はその否定説で、現在伝承されている古墳は万葉時代を下るいつ頃からか菟原処女伝承に付会されたもので、八世紀当時伝承されていたものと同一とはみなしがたい、というものである。どちらかといえば、いくつかの論点をふまえる分だけ否定説の方が有力かと思われるが、なお現在のところ両説ともその決め手を欠いているというのが実状のようである。それもある程度は無理からぬところであって、なにしろ二つの時点の間には千二百年の時間の溝が横たわっており、それを埋めるべき有力な資料がこれといって存在するわけではないのである。

順序として、否定説の論拠を検討するところから始めよう。

現処女塚・求女塚を万葉時代のそれではないとする見解の代表的なものは、大正八年一月に発表された喜田貞吉の「上代の武庫地方」（『摂津郷土史論』所収）という論文である。その中で喜田は、次の三つの理由をあげて、「今の所謂処女塚又は求女塚なるもの」は、「情話の塚」には当らないとしている。

(1)是等の塚は余程高貴な身分のものでなければならぬ。

(2)互の距離が余りに遠きに過ぎる。

(3)是等の塚の構造は、福麻呂の歌の「磐がまへ」と言ふには当らぬ。岩構への塚とは大石を積み重ねて石室を造り、それを盛り土で蔽うて、円い塚を作ったもので、横に羨道の入り口の穴がある形式のものと思はれる。然るに今の処女塚の形式は、塚の頂上に棺槨を置く方の式で、岩構へといふ方ではありません。

このうち、(1)はとるにたらない。喜田は、この文章を書いた数年後にもほぼ同趣旨の文章を『神戸市史　別録一』（大正十三年六月刊）に発表しているが、いまその論述によって(1)を敷衍すれば、万葉集や大和物語に描かれた主人公たちは「必ずしも地方有力の人物なりきとも見えず、無論後世所謂処女塚の如き偉大なる墳墓を築造」されるはずがない、それらの墳墓の主は「余程高貴な身分のもの」であったはずだ、と考えるのである。だが、この思考においては、明らかに事実についての考察と伝承についての考察とが混同されている。喜田のいうように、それらの墳墓の実際の被葬者は「高貴な身分のもの」、言いかえれば有力な地方豪族であったにちがいないが、そのように認定される事実と、それらの墳墓を処女・壮士の墓とする伝承とは、本来的に別次元にあるはずだ。古墳築造時の被葬者の記憶が薄れ変容していく過程で、被葬者についての事実がある幻想にとってかわられ、幻想がまことめかして語られだすのは、むしろ伝承というもののもつ普遍的性質の現われといえよう。たとえば播磨国風土記で、古墳が応神天皇の飼い犬の墓とされたり、豪族の首長の婢（侍女）の墓、また馬の墓と語られていたりするのも、事実の忠実な記録とは思われず、幻想の領域で主観的真実として信じられていたことがらにほかならない。

(2)および(3)は、否定説の有力な根拠となり、以後も祖述されることが多い。[注5] しかし、(2)の三古墳の互いの距離が遠きに過ぎるというのも、事実としてはたとえそうであっても、伝承のレベルで「遠きに過ぎる」と果たして言えるかどうか、疑ってかかる必要がある。また(3)の古墳の形状についての説はいちおうもっともなようだが、これも落合重信氏の批判、すなわち、「磐構へ作れる塚」という田辺福麻呂の表現（巻九、・一八〇

一）をそうまで事実視する必要はなく、古墳墓の築造を前期中期古墳のそれを知らない福麻呂が奈良朝当時の知識で一般的に歌ったもの、という解釈[注6]や、森浩一氏の「（処女塚は）墳丘のすそに頑丈な根石を並べ、それより上の墳丘の斜面に葺石がほどこされていて、がっしりと石固めにした状況がうかがわれた。おそらく田辺福麻呂が、「磐構へ　作れる冢を」という表現をしたのも、このような構築法をいっているとみてよいだろう」という説[注7]を考慮する余地は十分残されていよう。

現古墳否定説がその論拠とする(1)～(3)を検討してみると、そこに一貫しているのは一種の近代的合理主義的態度である。つまり、万葉集や大和物語からみて「是等の男女は必ずしも地方有力の人物」ではない、と判断され、従って当初は（万葉時代も）、彼らにふさわしい規模・位置・形状の墓が存在したはずだ、ところが現在伝えられている墓はそれらしくないので後世に付会されたものであろう、とこのような論法で伝説と墓との関係が合理主義的に解釈されている。しかし、同じく妻争い伝説で、たとえば大和三山の話などを考え合せてみる時、伝説をささえているのは必ずしも現代から見ての合理性などではなく、古代人の存在論的思考や神話的想像力であると考えなければならない。本来独自の発想と論理をもつ伝説自体のレベルでこそ、処女伝説と古墳の関係も理解される必要があるだろう。

なお、喜田はほかにも、南北朝の今川了俊の紀行「道ゆきぶり」（応安四年・一三七一）に、

程なく生田川につきぬ。此の川の鳥射しますらをの塚とて、道の辺近くむら立ちたる松原遙に音信して、聞き過ぐし難かりき。

とあるから、了俊の頃には生田川の畔に男たちの塚があった、という吉井良秀の説[注8]を引いてこれを肯定し、だから今の三塚は南北朝以後に付会されたものだと説いている。「道ゆきぶり」の記事は、たしかに十四世紀の後半、生田川の近辺に伝説の男の塚が存在したらしいことをものがたる。しかし、ここではその近さのほどが問題である。「道ゆきぶり」におけるこのあたりの名所の叙述はかなり急ぎ足で、この個所の直前には、

うちでのはまうちすぐれば、ざいご中将のわがすむかたといひけんあしやのさとになりぬ。それよりこなたに磯ぎはちかき松かげに玉垣神さびて鳥居などたてるところあり。北野の宮の此ところにやうがうしたまひてよりのち、御影のまつ原と申なるべし。

（群書類従十八による。以下同じ）

と、「うちでのはま」「あしやのさと」「御影のまつ原」とたて

つづけに三カ所を述べ、この個所の直後は、

さてみなと川といふところに一夜とゞまりて、ありしかば、

（以下略）

というふうに、東から西へ、空間的にも時間的にもいかにも早足である。打出の浜から湊川まで、直線距離で約十四キロメートルの間に、三つの名所を並べている勘定になる。このような文章の流れの中に置いて当該個所を読むなら、塚の所在を必ずしも生田川の畔に限定できないように思われる。原文にも「道のべ」とあって、「川のべ」とはない。思うにこの「いくた川につきぬ。此川に鳥いしますらをのつかとて……」という続き具合には、大和物語の生田川伝説の知識を背景に、生田川のゆかりで塚のことを述べようとする作者の意図が透いて見えている。そしておそらく、生田川――生田川伝説――塚という連想をもつ当時の読者にも、それは受け入れられやすい叙法であったにちがいない。従って、「道のべちかく」の「ますらをのつか」が、たとえば現在の西求女塚（旧生田川筋より東方約三キロメートル）であったとしてもさしつかえないのである。

あるいはまた、たとえこうした読解がやや強引で、了俊の見た男の塚はやはり生田川のほとりに求めるべきだとしても、『兵庫県史蹟名勝天然記念物調査報告』第四輯の「菟原ノ処女塚」の項の著者が指摘するように、「道ゆきぶり」の記事は万葉の処女伝説に直接には関係せず、もっぱら大和物語の生田川伝説に関与するものであることのみは疑いえない。生田川伝説のゆかりで、後世生田川のほとりに男の塚が求められたという可能性もある。

以上のごとく、現在の三塚の伝承を否定する説のいくつかの論拠を検討してみると、伝承の性質の理解や文献の読解においていずれも不十分な点を含んでいて、いまだ決定的なものとはいえず、せいぜいそうした見方も可能だという程度にとどまる。しかし、だからといって、否定説への批判がそのまま伝承の積極的な肯定に結びついていくわけではないことも自明であろう。積極的な肯定のためには、現在そう伝承されているという事実のほかに、万葉時代に遡りうるたしかな証拠、ないしは推論が必要だが、今のところそれは説かれていない。

だが、試みはあった。たとえば、前述の『兵庫県史蹟名勝天然記念物調査報告』第四輯（昭和二年三月）である。この報告中の「菟原の処女塚」の著者は、塚に関する近世以前の地誌をたどるという方法で、現在の三塚の伝承が何時頃からのものかという疑問に迫っている。そして、この伝承は少くとも江戸時代の中期まで、文献上遡れることを明らかにしながら、結局、

ソレ以前ニ関シテハ未ダコレヲ立証スベキ資料ヲ得ズ。サレバコレ等ノ遺蹟ガ果シテ万葉集謂フ所ノ葦ノ屋ノ菟原処女ノソレニ比定シテ全然誤リ無キヤ否ヤハ記録ノ上ヨリコレヲ立言スベカラズ。

と、慎重な結論を下している。同様な調査を私も試みてみたけれども、少くとも三塚にふれる地誌関係の文献では、ほとんどこの『調査報告』四の成果以上に出ることはできなかった。ただ、『調査報告』四は、現在の三塚の伝承をのせる最古の地誌として、「摂陽群談」（一七〇一年刊）を挙げるが、神戸市立図書館所蔵の「摂津之絵図」[注9]が、地誌ではないがより古い資料であるらしいことを指摘しうるのみである。この明暦三年（一六五七）作らしい絵図にしるされた三塚の所在地は、現在のそれと一致する。

三

このように現在の三塚の伝承は、十七世紀中ごろまで、つまり今から約三百年前までは諸種の資料によって確実に遡ることができるが、万葉時代までにはなお九百年の間が横たわっている。とはいっても、その間、処女塚また求塚に触れる文献がないわけではなく、大和物語の生田川伝説をはじめ、謡曲求塚、源平盛衰記、太平記、それに先の道ゆきぶりなどがそれぞれの角度から塚を叙している。しかし、いずれもその地理的位置を詳しく伝えてはいないのである。

ただ、三塚のうち処女塚に関しては、次にあげる堀河院百首（長治元年（一一〇四）頃第一次成立）の源俊頼の歌（雑部・題海路）は、直接処女塚の位置にふれるものではないが、注目すべき資料であろう。ただし、異文の多い歌で、特に初句に異同が大きいのは問題だが、いまは顕昭の袖中抄に引かれたものをあげる。

もとめづかおまへにかかるしばふねのきたげになれやよるかたもなし[注10]

（日本歌学大系別巻二による）

おおよその歌意は、求塚、そして御前を航行する柴船が、北風（きたげ）のために岸に寄りつけないでいる、ということであろう。[注11]初句は「もとめづか」で「をとめづか」ではないが、袖中抄に「をとめをもとめと書歟。をとめと同響也」とし、由阿の詞林采葉抄にも「コノ処女塚ヲ俊頼朝臣ハモトメツカトヨメリ」と注するように、[注12]この「もとめづか」は処女塚または万葉歌の「処女墓」をさすと考えて誤りはない。謡曲求塚（十四

世紀中頃成立か）で処女塚は求塚と呼称され、近世の資料にも処女塚を求塚とするものが散見する（後述）が、すでに十二世紀初頭ころにおいても処女塚を求塚と呼称することがあったと了解できるのである。

さて、歌は求塚に近く海路を行く柴船を点綴する。少くとも、求塚が海辺にあり、[注13] かつ相当な規模のものでなければ、このような歌いぶりはかなわないはずである。そのうえ、作者源俊頼は堀河院百首成立以前に大宰府と往還したことがあり、散木奇歌集巻六にその還路の折の詠を多数残しているほどだから、この歌の叙景は実体験をふまえているとみてよい。[注14] だとすれば、この歌の求塚について吉永登氏が、「これを現在のそれでないと否定することは困難であらう」と説くように、[注15] この求塚が現在の処女塚（吉永氏は必ずしも処女塚と限定していない）である蓋然性は大きい。十二世紀初頭においても、処女塚は現在のそれであったらしいのである。

そして、さらに興味深いのは、この歌のように処女塚が海路の船と関係して歌われる例が、すでに万葉歌に存在したということである。

玉藻刈る処女（乎等女）を過ぎて夏草の野島が崎に庵す我は　（巻十五、三六〇六）

この歌は、柿本人麻呂の羇旅歌（巻三、二五〇）が伝承途中で変形したものと思われるが、天平八年（七三六）の遣新羅使人に「海路（うなぢ）」（三五七八題詞）で古歌として「所に当りて誦詠」（三六〇二題詞）されている。「処女」は処女塚のある所の地名と考えられ（後述）、塚そのものが歌われているわけではないけれども、船から望まれた海岸地方処女の景の中には必ずや処女塚が存在したことであろう。すると、いかにも細い脈路のようだが、菟原沿岸を航行する船から処女塚を見て歌うこと、または処女塚に船を配して歌うことは、「海路」（万葉集三五七八題詞。俊頼の歌の題）という題を通じて一つの伝統としてあったといいうるのではないだろうか。あるいはこの場合は、俊頼の積極的な万葉歌受容が、万葉の処女塚を和歌的な景として復活させたというべきなのかもしれない。[注16] いずれであるにしろ、もしこのような脈絡において俊頼の歌また万葉歌を読むことが可能であるなら、現処女塚を万葉時代にまで遡らせうる一つのルートが、細々とではあるがここに存在したということになる。

四

さらに、別の角度から考えてもみよう。それは、現処女塚の

所在する土地の名の変遷に着目することによって、現代と万葉時代のつながりを求めようという方向での考察であるが、その輪郭はこうである。処女塚の所在地は、先にも記したように、現在の行政区分では神戸市東灘区御影塚町二丁目であるが、そのあたりは近年まで「東明」と呼ばれていた。東明の呼称は、少くとも十八世紀初頭までは遡る。ところがそれ以前は、東明村ではなく遠目村と呼ばれていたことが、近世のいくつかの資料からたしかめられる。一方、万葉時代の処女塚のあたりは、伝説のゆかりから処女と呼ばれていたらしい。ヲトメとトーメでは、音がやや近い。すると、〈ヲトメ——トーメ——トーミョー〉という地名の変遷が考えられ、そしてこれこそが、万葉時代の処女塚が現在のそれと同一であると判断する場合の有力な証拠となりうるのではないか——。

この仮説を証明するためにはいくつかの論証を必要とするが、まず遠目から東明への変遷は、すでに御影町史なども述べるところだが、なお詳しく、次に資料を年代順に提示することによって明確にしておこう。主として、管見に入った十八世紀以前の資料をしるす。

資料名	成立または刊行年	村名
摂津之絵図 A	明暦三・一六五七	遠目村
摂津名所地図 B	寛文七・一六六七	遠目村
海瀬舟行図	寛文七・一六六七	トヲ目
摂陽群談	元禄一四・一七〇一	遠目村
摂津国郷帳	元禄一五・一七〇二	東明村
兵庫名所記	宝永六・一七一〇	遠目村
尼崎領分絵図	延享四・一七四七	東明
摂津国名所大絵図 C	寛延元・一七四八	東明
神戸村留日記	明和六・一七六九	東明村
播磨めぐり	明和九・一七七二	遠目村
大和物語虚静抄	安永五・一七七六	東明村
摂津名所図絵	寛政一〇・一七九八	東明村
冠辞続貂	享和元・一八〇一	遠明村
播州名所巡覧図絵	文化元・一八〇四	東明
新改正摂津国名所旧跡細見大絵図	天保七・一八三六	東明

注　A・Bは神戸市立図書館蔵。同図書館には、他に享保十二年（一七二七）成立と伝える古絵図一枚があり、「東明村」としるすが、なお成立年次を確定しがたい。Cは大阪府立図書館蔵。

見てのとおり、江戸中期に村名として遠目と東明が入り組んだ様態を呈しているが、この頃が遠目村から東明村への移行期と考えてよいのではあるまいか。(注17) その点で、兵庫名所記に「遠明村」、やや時代は下るが、上田秋成の冠辞続貂にも「遠明村」とあるのは注目に値する。また、摂津名所図絵の「東明村」も移行期のあり方と理解できよう。

次に、万葉時代に処女墓のある所がそのゆかりから処女と呼ばれていたらしいことは、既述のように万葉歌（巻十五、三六〇六本文歌、および巻三、二五〇、一本歌）に「玉藻刈る処女を過ぎて」とあることから知られる。そして海路を行く歌人に望まれた「処女」は、少異する人麻呂の歌（巻三、二五〇本文歌、および巻十五、三六〇六の左注の歌）における「玉藻刈る敏馬」と同様、菟原の海岸地方の一地域であったと考えられる。それにしても、「処女」とは珍しい地名で、それゆえ本居宣長の万葉集玉の小琴は、「処女と云地名有べくもあらず」と地名説を斥ける。だが、一概にそうとも言いきれない。さしあたり大日本地名辞書によってみても、下野・肥後・豊前各国に乙女という地名は存在する。(注18) また古いものでは肥前国風土記杵島郡に「嬢子山」があり、これを記紀の用例に徴してヲトメ山と訓むことは十分可能だし、和名抄で信濃国小県郡「童女乎奈無」郷という類例をひろうこともできる。だからありえない地名ではないが、珍しいことは事実で、だからこそ契沖の万葉代匠記以下が説くように、地名「処女」の背後には菟原処女伝説が息づいているという推定が高い蓋然性をもってくる。地名が伝説や神話によって生き生きとささえられてあるというあり方は、風土記にあまたの地名起源の説話がしるされたように、古代においてこそ普遍的なのではあった。

さて、この処女塚の所在するヲトメ（処女）という地域の名が、その時期は不明だが、トーメ（遠目）に変化したのではないだろうか。同様な推理は、現在ではほとんど顧みられることがないようだが、すでに江戸時代に示されている。

今兎原郡に遠明村と云所にうばらをとめの塚あり。遠明はをとめの呼たがへなるべし。

（上田秋成「冠辞続貂」一八〇一年刊）

あるいは云ふ、いにしへは、このほとりの地名ををとめといひて古き名所なり。東明はタウメにて、すなはちをとめの転語としるべし。

（「播州名所巡覧図絵」一八〇四年刊）

秋成は〈ヲトメ→トーミョー（トヲメウ）〉という変化を説くのだが、既述のようにトーミョーはトーメの転と考えられるから、播州名所巡覧図絵の説くように〈ヲトメ→トーメ→トーミョー〉と段階的な推理をする方がわかりやすい（ただし巡覧図絵で、トーメをタウメとし、専女（老女）の意をにおわせるのには従えない）。しかし、〈ヲトメ→トーメ〉について、秋成は「呼たがへ」、また巡覧図絵は「転語」というが、音韻レベルで、〈wotöme → (tome) → to:me〉とwo音（または後述する求のmo音）の脱落を想定することは、他に例を見ないことからも困難であろう。もう少し複雑な言語変化の現象が、ここには介在しているように思われる。

万葉集の「処女墓」は、旧訓どおりヲトメツ（ヅ）カとも訓みうるが、大和物語では「処女塚」である。藤原俊成の五社百首にも、「うらみ」の題で、

をとめづかのちは梢ぞなびきけるうらみはたえぬものとこそきけ

とあるが、歌句および歌意からすればこれは明白に万葉集の高橋虫麻呂の歌の反歌、

墓の上の木の枝なびけり聞きしごと血沼壮士にし依りにけらしも（巻九、一八一一）

を直接ふまえている。こうして、大和物語や万葉集に直接換った俊成の歌ではヲトメヅカであるが、しかしこの処女塚は、中古末期から近世中期にかけて、二つの壮士塚とともに「求塚」と呼ばれることがあったらしい。先の院政期の俊頼の歌、および中世の謡曲は処女塚を「求塚」と呼び、近世に入っても、処女塚を注して北村季吟の大和物語抄（慶安二年・一六五三）は、「今の世には、もとめづかと誤りていひ侍ルとぞ」とし、木崎雅興の大和物語虚静抄（安永五年・一七七六自序）にも、「土人、求塚といふ」とする。この点は地誌類でもたしかめられ、難波丸（元禄九年・一六九六刊）に、「求塚」を「三つ有」とし、続く十八世紀前半においても、和漢三才図会や難波丸網目（難波丸の改版）などにほぼ同様の説が見出される。[注19] また寛延元年（一七四八）の摂津国名所大絵図にも、処女塚を「求塚」としるしている。これら近世の例は、前代の呼称の継承ないしは残存とみなしてよいだろう。

モトメ塚といえば、近世より現在に至るまで、「求女」の字が充てられ伝説の男どもの墓とされるのが一般だが、それがふつう「処女（乙女）塚」との対応において現れている（明暦三年摂津之絵図・兵庫名所記・摂津志、他）点、女の墓の呼称が

大勢において「求塚」から「処女塚」へと移行（大和物語にすでに見られる点からいえば、復活）、定着したことと連動して、女を求めた男の塚とする合理解が働いた結果、これまた「求塚」から移行、定着した、より新しい呼称であるように思われる。近世でもより早い時期の「福原鑒鏡」（延宝八年・一六八〇刊）に女の墓を「乙女塚」としながら、男のそれを「求女塚」ではなく「求塚」とする特異さは、過渡期の現象と理解してよい。

さてこのように、中世前後女の墓の呼称として「求塚」が優勢であったとすれば、それにつれてその頃、万葉時代の「処女」という地名も、「求」（モトメ）に変化していた可能性が強い。「求塚」が「俗」称（和漢三才図会）であり、「土人」の呼称（大和物語虚静抄）であるとする指摘は、この際有意義である。なお、やがて女の墓の呼称は「処女塚」が優勢になるが、地名もそれにつれて「ヲトメ」へと復することは、後述のように、なかった。(注20)

ちなみに塚の名の、「処女」から「求」への変化の理由は、推測によるしかないが、上代において若い女を意味する「をとめ」が、平安時代になると「五節の舞姫」の意へと意義を特化し、代わって「をんな」が一般的に使われだすという語彙史上の事実を背景として、「をとめ」という呼称がいったん廃れがちになり、一方で音の類似に引かれながら、万葉集の虫麻呂歌や大和物語にいちじるしい、処女を二人の男が競い合って求めるという伝説のモチーフが強く意識された結果、やがてそうした変化を招来したということではないだろうか。二人の男が女の塚まで「求め来」たので塚を求塚と名づけた、という謡曲求塚の解釈の存在は、この推測があながち不当ではないことを裏書きしよう。

そうして、菟原地方の中世において、「求」（モトメ）は「求」（トム）でもあった可能性がある。トムという語は、おそらく「跡」（ト）を語源として、後を追って行く、探す、尋ねる、の意で、雅言集覧に万葉から中古・中世の和歌や物語の例を引くように、古語・雅語として多くの使用例がある。このトムは類似語「もとむ」とその語源は異にして（時代別国語大辞典上代編「もとむ」の項）、モトムよりは動作の具体を強く印象させる語だが、しかし使用の実際においては二つの語は時として置換可能なほど、その意味領域を近接させる。現に、虫麻呂歌で自殺した処女を追って行った（「尋め行きければ」一八〇九）男の墓、または求められた女の墓が、後世、「求塚」（モトメ）なのであった。類聚名義抄（観智院本）に「認」の字訓としてモトム・トム両訓ともがあげら

れているのも、両者の意義の近接をうかがうには足りよう。そして、文明十六年（一四八四）に成立した国語辞書、温故知新書は、「求（トムル）尋也」としるす。また近世の辞書でも、書言字考節用集（元禄十一年・一六九八成立）に「求米（トムクレバ）」のごとき例を見る。「求」字がモトムを一般的な訓としていたとしても、その意義の近さからトムの訓が充てられることもあったということを、このような例は示している。

辞書の例は、おそらく書承過程で「求」に充てられた雅語としてのトムと了解しておく方が無難であろうから、直接には「求塚」をトメ塚と訓むべきだという論の証拠とするわけにはいかない。だが一方で、トムは興味深い地方的展開を示している。

たづぬるといふ事を播磨及出雲辺又土佐にてとめると云
（物類称呼、安永四年・一七七五刊）

菟原を含む摂津国と踵を接する播磨国などで、トメルという語（トムが連体形終止となり、さらに一段活用化した語形）が使われていたという。それは十八世紀後半のことだが、約二百年後の現代の方言研究においても、類似の状況が報告されている。[注21] 現代において旧菟原郡内で尋ねる、探すの意のトメルは聞かれていないが、トムが既述のように古語で、それが後世口語として残存し、西日本各地に方言化したという経路が容易にたどられる以上、中世以前にはさらに広い地域でトムが使われていた蓋然性はすこぶる大きく、摂津西部の菟原地方もその中に含まれていたことが当然推測されてよい。だとすればその時代、この地方では「求塚」がモトメ塚ではなくトメ塚でありえた。物類称呼を遡ること八十余年、大坂で刊行された「不断重宝記大全」（元禄四年・一六九一）にも、

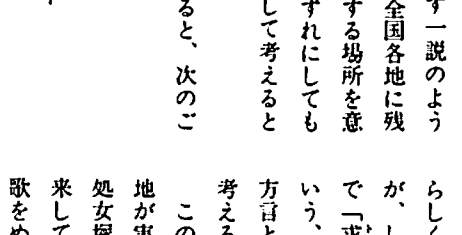
中国の詞に物を尋るをとめると云ハ、もとめるの上略の詞なるべし。

とある。ここでの「中国」は、京・丹後・但馬などを対比すべき地域として用いられており、ほぼ現在の中国地方をさすかと思われる。トメルをモトメルの「上略の詞」というのは信じ難いが、しかしこのようにモトメルとの関連において、トメルが方言として特に取り上げられていることは、「尋（たづぬ）る」の意味領域における限り、この地方ではモトメルを排して、あるいはより優勢に、トメルが使用されていたことを証しているのではあるまいか。「尋る」はまさに処女に対する男どもの行為であったから、するといよいよ、中世以前における菟原地方で、「求塚」はトメ塚であり、従って地名もモトメではなくトメであった可能性が強い。古くこの地の名は、「求」字を中にはさんで、

名所としてはモトメでも、地元菟原地方ではトメであったのではないだろうか。書承過程でしるされた、古語・雅語としての「求」は、こうして異なる位相で、方言としての「求」に伏流のように生きつづけてもいたのである。

そして、その「求」がやがて既述の「遠目」に接続していく。それは、トメの再解釈または合理解として「遠目」の文字が充てられるようになり、またそれにつれてトーメと長音化する過程と考えられよう。「遠目」は、御影町史にしるす一説のように、荘の中心から遠くに見える意[注22]とも、あるいは全国各地に残る、遠見山・遠見崎などの「遠見」と同じく遠望する場所を意味するとも思われ、[注23]どちらとも定まらないが、いずれにしても〈トメ→トーメ〉という変化は、地名のそれとして考えるとき、さほど無理を感じさせまい。

本節における以上の論述をわかりやすく図示すると、次のごとくである。



ヲトメからトーミョーへ、三段階の変化をたどったと推定するわけだが、そのうち③は文献が明証する。また①のうち〈ヲトメ→モトメ〉も、塚の名を通して資料によりたしかめられる。そして②も、トーメから遡って推定可能な変化であるが、ただ、トメという地名をしるす資料は今のところ見出しえず、従って①および②の〈ヲトメ→トメ→トーメ〉は推測によらざるをえない。それは第一に、この地方を村落レベルでしるす地誌や絵図の類の残存が中世以前には皆無であるという資料上の制約、第二にやはりその頃、塚のある地が未開発であったらしく、記録類にも地名が残りにくいという事情によるはずだが、しかしその空白を補って、「求」が、特に地元である菟原で「求」でもありえたことが、文献上における「求」の存在という、より一般的な事実にささえられつつ、この地方における方言としてのトムの可能性を探ることによって説明されうると考える。

このように、地名の検討を通して、現在処女塚のある東明の地が実は古の処女の地にほかならないと考えられるなら、その処女塚は万葉の時代から今に至るまで、それとして変りなく伝来してきたことになる。ここに、先の源俊頼の「もとめ塚」の歌をめぐる推定とも合せ考えて、現処女塚は万葉時代の「処女墓」と同一のものであると推定したい。

五

では、二つの求女塚の場合はどうであろうか。現在の三塚を古代のそれではないと否定する説では、その一つの根拠として三塚があまりに離れすぎていることを挙げ、本来の三塚はもっと近接して並んでいただろうという。しかし、離れすぎているという考えは、先にも述べたように、近代の合理主義的態度による常識的判断というべきである。少くとも、文献により知られる範囲ではほぼ近世を通じて、三塚が離れすぎているとは考えられてこず、逆にそのような常識をこえて伝承が生きつづけてきたという事実の方をこそ、私は重視したい。伝承に示されているのは、それを信じ伝えてきた時代の人々の想像力を媒介とする世界解釈の一端であって、それはそれ自体の論理を有するが、決して事象の近代風に合理的な解釈ではない。三塚が近代人の目に離れすぎていると映るとしても、それは伝承をつくりささえてきた人々の異質な想像力を理解する材料とこそなれ、それをもって合理主義の刃で伝承そのものを解体させてはならないのである。

処女塚が古のそれと定められるなら、二つの求女塚もまた万葉時代の「壮士墓」に合致する可能性は強い。三塚の推定築造時期からすると、五世紀中葉にはすでに、現在の三塚が菟原の海岸沿いに出現していた。その頃三塚の北部に、坊ケ塚・扇保（へば）曽塚と後に呼ばれる二基の前方後円墳が存在した（現在はいずれも消滅）ようであるが、今のところ三塚の周辺にそれ以外の比較的規模の大きい古墳は見出されていない。むろん、現在は知られずとも、長い時の経過のうちには多くの古墳がいつとも知れない間に破壊され、消滅していったであろうという一般論は認容しておかねばならないが、処女塚が現在のそれと定められるとすれば、それに規模も形状も匹敵し、加えてその位置関係も適当な古墳基を、現在の処女塚以外に想定することは難かしいのではないだろうか。

このような推定は、文献における塚についての叙述からも、ある程度裏書きされるように思われる。まず虫麻呂歌に、

処女墓　中に造り置き　壮士墓　こなたかなたに　造り置ける

とある。また、多分に物語的要素を含むが、大和物語にも、

この女の塚のかたはらに、又塚どもつくりて、ほりうづむ時に、（中略）されば女の墓をなかにて左右になむ男の塚どもいまもあなる。（日本古典文学大系本による）

と類似の叙述がある。これだけでは、男の塚が女の塚の左右に造られたという以外、その規模や位置関係などの具体的については何も知られないようだが、しかし処女塚を中に、左右に男の塚を造ったという両者に共通する叙述は、男の塚が処女塚と不釣り合いに小規模のものではなく、比肩しうる大きさをもっていたことを語ってはいないだろうか。また、万葉歌の「こなたかなた（原文、此方彼方）」という表現は、三塚の間のある程度の距離を感じさせもする。さらに、二資料とも塚の築造順序を、三塚同時というのではなく、まず処女塚、次いで男の塚と叙す点も、興味深い。この順序は、発掘調査の結果、現在推定されている現三古墳の築造順序と符合するからである。古墳の実際の築造順序についての記憶が、伝承に反映しているのかもしれない。

また、蛇足に近いけれども、三塚の距離について考えると、実際に現地を見て歌を作ったらしい高橋虫麻呂や田辺福麻呂が、処女墓を実見したこと、またそのありさまは歌っても、二基の壮士墓のありさまについてはいっさいふれることがないという事実にも気づく。処女墓については、虫麻呂「菟原処女の奥槨（おくつき）を往き来と見れば」（一八一〇）、「墓の上の木の枝靡けり」（一八一一）、福麻呂「菟原処女の奥つ城をわが立ち見れば」「処女らが奥つ城所われさへに見れば悲しも」（以上、一八〇一）、「菟原処女の奥つ城ぞこれ」（一八〇二）と、処女墓を実見したこと、その現状が歌われており、それぞれの題詞からして、「菟原処女の墓を見る歌」（一八〇九）、「葦屋の処女の墓に過る時に作る歌」（一八〇一）なのである。しかし、壮士墓を見たことやそのありさまについてはいっさい歌っていず、わずかに福麻呂が「小竹田壮士」（一八〇二）「古壮士」（一八〇三）を想念の中で偲ぶのが注意される程度である。「吾妹子にあが恋ひ行けば乏しくも並び居るかも妹と背の山」（巻七、一二一〇）などと表現する万葉歌の例からしても、このことは不審な一点である。これは、三基の古墳がある程度離れた場所にあって、処女墓の前からは他を並べ見ることができなかったためではないだろうか。

以上、小稿での検討の結果は、つまるところ、現在の処女塚および求女塚を、万葉時代の処女墓および壮士墓と同一であるとみなしてよい、という一事である。ここに一試案を示して、後考を俟ちたい。

注1　村田正博「『おくつき』考」（『山辺道』二五）
注2　仲松弥秀『神と村』
注3　このほか「乙女塚」と称するものが近年まで脇浜町三丁目三付近に存在し（西摂大観）、別に生田川のほとりにも「おとめ三塚」が存在したという（野中春水『歌枕神戸』）が、いずれも上述の三塚より古い由来伝承をもつとは確められない。またこれらの存在には大和物語の生田川伝説の影響が濃いように思われる。
注4　表の作成にあたっては、特に神戸市教育委員会発行の「東求女塚古墳現地説明会資料」（昭和五七年九月二六日付）を参考とした。
注5　阪口保・増田徳二『万葉地理研究　兵庫篇』など。
注6　落合重信『神戸の歴史　研究編』
注7　森浩一編『万葉集の考古学』
注8　吉井良秀「摂津国武庫郡灘の処女塚考」（『考古学雑誌』三―九）。なお、喜田説としてあげた(1)および(2)も、本論文ですでに言及されているところ（大正二年五月刊行）。
注9　巻子本一巻。箱書に「古写摂津之絵図　明暦三年武庫川より明石に至る」とする。外題や奥書はないが、内部徴証により明暦三年書写と判断される。なお、これとは別に、慶長十年（一六〇五）の奥書をもつ「摂津国絵図」が西宮市立図書館に所蔵されており、同館の写真によれば、三塚のうち西の「求女塚」のみをしるしている。
注10　橋本不美男・滝沢貞夫『校本堀河院御時百首和歌とその研究本文研究篇』によれば、初句を「もとめづか」でなく「もとめつる」とする伝本も多く、『新編国歌大観』三（散木奇歌集）も本文には「もとめづか」を採りながらも、「なお特に考察の余地を残すもの」のうちにこの異同を挙げる。そうではあるにしろ、「もとめづか」という本文がすでに古く袖中抄あたりから見える点、散木奇歌集九に「もとめづか」と題する歌の存する点、および歌意からして、「もとめづか」という本文はかなりの程度信頼できると私は考える。
注11　第二句「おまへ」については求塚の前と解く説が古くからあるが、ここでそれを一つの地名と解するのは、散木奇歌集六に、輪田を叙する歌と生田を叙する歌の間に「おまへといふ所にて風吹きなどす（中略）その神にみてぐらたてまつるとてかきつづけける」という詞書きをもった「おまへ」を叙する歌があるからである。生田社前の地名か。
注12　その他、堀河院百首の陽明文庫古注・堀川百首肝要抄も同趣旨を注す（いずれも橋本・滝沢『校本堀河院御時百首和歌とその研究索引注篇』による）。
注13　明治十八年の地形図で、今の処女塚は海岸より約二〇〇メートルの近さにあるという（前掲、森浩一編著）。
注14　注11の引用文中の「風吹きなどす」と、「きたげになれや」とは、「御前」という土地における俊頼の実体験として重なろう。
注15　吉永登「芦屋の処女塚」（『万葉集大成』月報四）
注16　海路の歌ではないが、同じく俊頼の散木奇歌集（巻九）に、「もとめづか」という題で、
　たらちねももとめざりせばをとめごと跡にもかげをならべ

ましやは

という歌を載せ、現在の阪神間や神戸の歌枕を並べた個所に配している。

注17　大正十五年刊の『武庫地方郷土史料目録』に、

○天正八年一番田地数分　八幡・東明・高羽・平野等の地名あり

とする。これをそのまま信ずべきだとすれば、「東明」の地名は一五八〇年まで遡ることになるが、一番田地数分は未見。

注18　その他、五月女坂（下野）もある。また、『日本地名索引』『日本歴史地名総索引』などによれば、なお五例ほど地名「乙女」を追加できる。ただし、これらの中には、たとえば相模の「乙女峠」が、近世番所を置いたがゆえの「御留峠」に由来するというような、比較的新しい時代の命名にかかるものもいくらかは含まれているであろう。

注19　その他、摂陽群談（元禄一四年・一七〇一刊）には、三塚を「処女塚」として掲げるが、「一名求塚と称す」とも記し、ほぼ同時期のものかと思われる貝原益軒の扶桑紀勝もこれと同説。

注20　地名が後世において塚の名と異なり、独自の変遷をたどった一つの理由は、その時代（中世～近世）、塚の周辺に村落（遠目付・東明村）が発展したことに求められるであろう。摂津国郷帳（一七〇二年、『神戸市史』資料二所収）に、東明村は徳井村（東明の北にある）の「枝郷」として見える。当時親郷から分かれてほどない小村であったらしいが、そのことは郷帳に記載された石高の比較によっても知られ、徳井村三三七石、兎原郡四九村の一村平均約二五二石であるのに対して東明村わずかに三石八斗九升にすぎない。これは、一八世紀初頭頃、処女塚のあるあたりが未開発で人家も少なかったことを示している。郷帳より百年以上前の、天正一九年（一五九一）の摂津一国高御改帳并領主村名附（『神戸市史』資料二所収）において、徳井村を含めて兎原郡は四六村をしるすのに、遠目村（または東明村）の名が見えないのも、このことと関連して理解される。長い年月のこととて速断は避けねばならないが、この地域は長く人家もまれな開発の遅れたところで、海浜近くに古墳のみが目立つようなありさまであったのかもしれない。なお、いったいに灘の浜沿いには、東明と並んで新在家、出在家、新田、新家などの地名が多く見られ、主に近世の開発にかかることを示している。

注21　播磨の例ではないが、広戸惇『中国地方五県百語地図』（一九六五年七月）によれば、「探す」の意でトメルが岡山県北部や島根県東部など中国地方で広く使用されている。また土井八枝『土佐の方言』（一九三五年五月）にも、土佐で「尋ねる、探す」ことをトメルという由、記述がある。この意味のトメルは、『全国方言辞典』によれば、そのほか愛媛・徳島・南島でも使われている。

注22　近世初期、東明（遠目）が徳井村の枝郷でまださほど開発が進んでいなかったことなど、注20参照。

注23　現在、仙台市に「遠見塚」があり、名の由来は大名や戦時の斥候がその上から遠望したことにあるといわれる（『角川日本地名大辞典』4）。それが全長一一〇メートルの古墳である

ことが注目される。

（付記）本稿での結論を前提として、菟原処女伝説の形成についてすでに論じたことがある（拙稿、「菟原処女伝説の形成」（日本のことばと文芸」五、甲南女子大学国文学会）。また、本稿の要旨、および伝説形成論の要旨を、拙著、『万葉の歌――人と風土――』6にしるした。